SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「知っている」とknowはどこが違う？

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2019-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026271

「知っている」とknowはどこが違う？[1]

大　村　光　弘

1　はじめに

以下に示した会話は、『化物語（上）』の第三話「するがモンキー」において、阿良々木暦がクラスメイトの羽川翼に、高校の１年後輩にあたる神原駿河（かんばる）について尋ねる場面である。

（1）[2]　暦：「じゃあ、一個下の後輩で、神原駿河って奴、知ってるだろ？」
翼：「そりゃ、勿論、知ってるけど？　て言うか、神原さんのことを知らない人なんて、いるのかな？　阿良々木くんだって知っているでしょ？　バスケットボール部のキャプテン、学校中のスター。私だって、友達と一緒に、試合の応援に行ったことあるくらいだし。」
（西尾維新『化物語（上）』、第三話「するがモンキー」、p.310）

ここで、暦と翼は「（誰かを）知って（い）る」という表現を用いているが、本稿の関心は、この「知っている」の主体がどの程度対象と関わりを持っていれば、その対象のことを「知っている」ことになるのか、ということにある。

実際、「知っている」を英語のknowと比較してみると、興味深い相違点が得られる。試しに（1）を（2）のように翻訳してみると、これを読んだ英語の母語話者は、“Of course I do (=Of course I know her)”の記述から、翼が駿河と顔見知りだと解釈するだろう。これは、knowが、主体と対象がある程度の知り

[1] 本稿を書き上げる過程で、knowの語法や例文の提供など、Steve W. Redford先生から貴重で有益なご助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。
[2] （1）を含めた本稿の引用全般に関して、発話主体となっている登場人物の明示と発話内の下線は、ともに私が加筆したものである。

合いであることを意味するからである。

（２） Koyomi: “Do you know Suruga Kanbaru, who is one year below us?”
Tsubasa: “Of course I do. In fact, is there anyone who does not know who she is? Even you do, right, Koyomi?.....”

一方、「知っている」は、主体が対象とどの程度に関わり合いがあるかという点で、knowよりも制約が弱い。たとえば、（１）において翼は、「知っている」という表現を用いることで、神原駿河という名前を聞いたことがあるということと、バスケットボールをプレイする当人を見たことがあるということを含意しているが、お互いが顔見知りであるということまでは含意していない。実際、物語の時系列上、（１）の会話の段階で翼と駿河の間に面識は無く、二人は知り合いではないことになっている[3]。

「知っている」がある程度の交流や親密さを意味する事例も見ておこう。（３）は、赤川次郎の『家族カタログ』からの引用である。場所は、高校生の神山（こうやま）研一の父親が経営するコンビニで、研一はレジのカウンターで店番をしている。直前まで、買い物にやって来た幼馴染みで友人でもある内山涼子と話していたが、涼子が店を出て行くと、店内にいた刑事の倉田から声をかけられる。

（３）[4] 倉田：「君」
（びっくりした研一は危うく椅子から落っこちそうになる。）
研一：「あの――何ですか？」
倉田：「君は、今出てった女の子を知ってるのか？」
研一：「え？――涼子ですか？ええ、同じ高校ですから。」
（赤川次郎『家族カタログ』、第四話「叔父さんは大泥棒」、p.138）

倉田は店内で研一と涼子の様子を観察していたので、二人が親しい間柄であ

[3]『化物語』第三話「するがモンキー」よりも後のエピソードである第五話「つばさキャット」において、暦が駿河に意識を失った翼を自宅まで送り届けさせる記述がある。

（i）これが前に聞いた羽川先輩かと神原がときめきかけていたのを死ぬ気で止めてから、自宅まで彼女を送っていくようにお願いする。 （西尾維新『化物語（下）』, p.394）

（i）の下線部から、このとき駿河が初めて翼の姿を見たことがわかる。

[4] 発話者の明示とともに、小説の説明的記述をト書き風にアレンジした。

ることを容易に理解できた。この理解が得られたので、(3)のように尋ねている。(3)において倉田は、研一が涼子のことを聞き知っているのか尋ねているのでもなく、涼子に見覚えがあるのか尋ねているのでもない。倉田は研一に対して、涼子と親しい関係にあるのか、(確認の意味で)尋ねているのである[5]。

このように、日本語の「知っている」は、主体が対象とどのような関わり方をして、どの程度の知識を持っているのかについて、談話文脈にその解釈を委ねるという特性をもっていることがわかる。以下の議論では、knowの用法と対照させることによって、「知っている」の特性をより明確にするとともに、この特性が特定の語彙に限定されない、日本文化を背景とした日本語の特徴であることを主張する。

2　knowとの比較

2.1　「知っている」の主体と対象との関係性

前節で、日本語の「知っている」が用いられるとき、どの程度まで対象についての知識を保持しているのかについての解釈が、文脈に依存して理解されることをみた。このことは、「知っている」の意味において、当該部分が未指定であることを意味している。英語に議論を移す前に、「知っている」がもつこの意味特性についてさらなる証拠を例示しておこう。

(4)は、『ガリレオの苦悩』第五章「攪乱(みだ)す」から引用した一節である。『ガリレオの苦悩』第五章は、〈悪魔の手〉と名乗る人物から警視庁へ一通の犯罪予告状が届くところから始まる。その予告状には、T大学のY准教授(文脈上、帝都大学准教授・湯川学であることは明白)の名が書かれていた。以下の引用部では、多々良管理官と草薙刑事が、この犯罪予告状をどのように扱うべきか議論している。

(4)[6] 多々良：「挑戦状か。また、面倒なことを考える輩がいたものだ。しかし草薙のいうように、こんなものを受け取ったところで、こちらに出来ることは何もない。デモンストレーションを

[5] 倉田は、ある泥棒を追跡している。その泥棒は、自称・石井久士(＝涼子の叔父)として涼子の家に宿泊している。研一に涼子のことを訊いたのも、目当ての泥棒に関する情報を得たいがためであった。

[6] 小説内の説明的記述を削除し、全体を会話形式にアレンジした。

行うと書いてあるが、具体的に何をするのかは書いてないからな。事故に見せかけて人を殺めるということらしいが、どういう事故なのかが不明では対策のとりようがない」

草薙：「湯川に相談してみましょうか。仮に犯人が湯川への挑戦を目的としているのなら、何か心当たりがあるかもしれません」

多々良：「湯川准教授が犯人を知っていると？それなら話が早いが……」

（東野圭吾、『ガリレオの苦悩』、第五章、p.252）

（4）において、草薙は、湯川が犯人として考えられる人物や、何か犯人に繋がる事柄で思いつくことがある可能性を示唆し、彼に相談することを提案している。ここで注目すべきは、この提案を聞いた多々良が、「湯川准教授が犯人を知っていると（いいたいのか／思うのか）？」のように表現し、「知っている」を用いて草薙の意図を確認していることである。「心当たりがある」とは、心にこれと思い当たる人や事柄があることなので、「知っている」の主体と対象との関係性は、たとえば、名前や顔を知っているだけのごく希薄な関係から、家族や恋人のようなかなり近しい関係まで、広範囲に及ぶと考えられる。結論として、「知っている」の基本義に関して、対象をどの程度まで「知っている」のかは、語彙的に指定されていないと結論づけることができる。

別の例も見てみよう。（5）は『化物語（下）』第五話「つばさキャット」からの引用である。戦場ヶ原ひたぎは、暦と共に学習塾跡を根城とする忍野メメを訪ねた際、部屋の隅で体育座りしている押野忍を一度だけ見かけたことがあるが、会話は交わしていない[7]。この状況設定が与えられているので、（5）における暦の発話が意味をもってくる。すなわち、暦は、「姿を見たことがあるので容姿についての知識を持っている」という意味合いで、「知っている」を用いているのである。

（5） ひたぎ：「それで――阿良々木くんは、学校をサボタージュしてまで、その子を探しているというわけなのかしら？」

暦：「そう。だから、お前にも手伝って欲しいんだ――忍を直接

[7]『化物語（上）』第一話「ひたぎクラブ」（p.46）を参照されたい。

知っているのは……」
（西尾維新、『化物語（下）』、第五話「つばさキャット」、p.338）

因みに、暦は（6）に示したように、千石撫子（なでこ）にも忍を探してくれるように依頼しているが、ここでは「知っている」ではなく、「見たことがある」を用いている。

（6）[8] 撫子：「頼みたいこと……何？」
暦：「忍を探してほしい。忍を直接見たことがある人間は、お前を含めてもそうはいないんだ――お前が手伝ってくれると、正直、助かる」
（西尾維新、『化物語（下）』、第五話「つばさキャット」、p.325）

日本語の母語話者であれば容易に判断できることだが、（6）において「見たことがある」の代わりに「知っている」を用いて、「忍を直接知っている人間は、お前を含めてもそうはいないんだ」と言っても、もともとの文意が損なわれることはない。このように、（5）や（6）の文脈において、「知っている」と「見たことがある」は相互に代替可能である。

2.2 knowの意味的特徴

この節では、日本語の「知っている」との比較のために、英語のknowの語法を観察する。まず初めに、わたしが大学で英語表現法（いわゆる英作文の授業）を担当したときの話から始めよう。この授業で、わたしは受講生に自由にテーマを選ばせ、100語程度の短いエッセイを書かせた。ある洋楽好きの受講生が以下のように表現した。

（7） Do you know John Lennon[9]? He was a famous musician. I like his songs and music very much.
「ジョン・レノンを知っていますか？彼は有名なミュージシャンでし

[8] 小説内の説明的記述を削除し、全体を会話形式にアレンジした。
[9] ジョン・レノン（John Lennon, 1940-1980）はイギリス人のシンガー・ソング・ライターであり、世界的ロック・バンド、ザ・ビートルズ（The Beatles）のオリジナル・メンバーでもあった。ビートルズ解散後はソロとしてアメリカを拠点に活動していたが、1980年にファンの一人に射殺された。

た。私は彼の曲が大好きです。」

これらの文は文法的であるが、英語の母語話者であればすぐにある種の違和感を覚えるであろう。当該学生は、「知っている」をknowと翻訳したのだが、「知っている」とknowには意味のズレが存在する。日本語の「知っている」とは異なり、knowは対象とある程度の親交があることを意味する。したがって、世界的に著名なミュージシャンであり、しかも故人であるジョン・レノンと親交があると言ってしまうと、途端に意味的矛盾を引き起こしてしまうのである。それでは、当該学生はどのように表現すればよかったのか。考えられる例を幾つか示しておくことにする。

（8） a. Do you know anything about John Lennon?
「ジョン・レノンについて何か知っていますか？」
b. Do you know who John Lennon was?
「ジョン・レノンがどんな人だったか知っていますか？」
c. Have you heard of John Lennon?
「ジョン・レノンについて聞いたことがありますか？」

knowは対象とある程度の親交を有することを意味するといったが、この特徴を裏づける例を幾つか示しておくことにしよう。（9）は、アガサ・クリスティ（Agatha Christie）の『カーテン：ポワロ最後の事件（Curtain: Poirot's Last Case)』からの引用である。アーサー・ヘイスティングズ（Arthur Hastings）は、アラートン（Major Allerton）がエザリントン事件（レナード・エザリントンが薬物の過剰摂取によって死んだ事件）に何らかの関わりがあるのではないかと疑い、鎌をかける。

（9） “You knew Etherington, I think?”
At once I knew that I had struck a note of some kind. His eyes grew hard and wary. He said - and his voice had changed - it was light and artificial:
“Oh yes - I knew Etherington. Poor chap.” Then, as I did not speak, he went on: “Etherington took drugs, of course - but he overdid it. One's got to know when to stop. He didn't.”

(Christie, *Curtain: Poirot's Last Case,* Ch.6)

「あなたは（レナード・）エザリントンと知り合いだったんですよね」

すぐに、これは当たりだと感じた。アラートンの目が険しく、用心深くなった。アラートンは次のように言ったが、その口調はすっかり変わっていて、明るい、取り繕ったものになっていた。

「ええ、もちろん。エザリントンと知り合いでした。本当にかわいそうな奴です。」

わたしが黙っていると、彼は続けた。

「エザリントンは薬を常用していた、もちろん。でもやりすぎた。引き時は心得ていなければいけない。」

冒頭のヘイスティングズの発言は、エザリントンとアラートンが顔見知りだったことを知っていて、その事実確認を要請しているかのような響きを持つ。これは、ある程度の親交を意味するknowと、文脈上聞き手に命題内容への同意を促すはたらきをもつI thinkを用いていることによる。そのような口ぶりで話しかけられたので、アラートンは語るに落ちる。実際、アラートンは、レナード・エザリントンと知り合いであり、彼が薬物の常用者であって、その過剰摂取によって死んだことも知っていた。

つぎに、(10）を観察してみよう。(10）は、J. K. ローリング（J. K. Rowling）の『ハリー・ポッターと賢者の石（Harry Potter and the Philosopher's Stone)』からの引用である。

(10) When he had been younger, Harry had dreamed and dreamed of some unknown relation coming to take him away, but it had never happened; the Dursleys were his only family. Yet sometimes he thought (or maybe hoped) that strangers in the street seemed to know him. Very strange strangers they were, too. A tiny man in a violet top hat had bowed to him once while out shopping with Aunt Petunia and Dudley. After asking Harry furiously if he knew the man, Aunt Petunia had rushed them out of the shop without buying anything. A wild-looking old woman dressed all in green had waved merrily at him once on a bus. A bald man in a very long purple coat had actually shaken his hand in

the street the other day and then walked away without a word. The weirdest thing about all these people was the way they seemed to vanish the second Harry tried to get a closer look.

(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone,* Ch.2)

小さかった頃、ハリーは誰か見知らぬ親戚がやって来て、自分をここから連れ出してくれることを何度も何度も夢見た。しかし、そんなことは一度も起こらなかった。ダーズリー一家が唯一の家族だった。それでも、時々街で見知らぬ人がハリーのことを知っているのではないかと思うことがあった（実際は、そう思いたかったのかもしれない）。とにかく実に奇妙な人たちだった。ペチューニアおばさんやダドリーと一緒に買い物に出かけた時、店の中でスミレ色の帽子をかぶった小さな男の人が、ハリーに向かってお辞儀をした。おばさんは、知っている人なのかと激しくハリーを問いつめ、何も買わずに二人を連れて店を飛び出した。また、緑ずくめのとっぴな格好をしたおばあさんがバスの中で、ハリーに向かってうれしそうに手を振った。つい先日も、ひどく長い紫のマントを着たハゲ頭の男が、街中でハリーとしっかり握手までしてそのまま一言も言わずに立ち去った。一番奇妙なのは、ハリーがもう一度よく見ようとすると、突然こうした人たちが消えてしまうことだった。

（10）では、街角で偶然出会ったはずの見知らぬ人々が、あたかも彼らがハリーと懇意の間柄であるかのように、お辞儀をしたり、手を振ってきたり、握手をしてきたりする。文中にknowが用いられているが、見知らぬ人々がとったこれらの行動は、本稿が想定するknowの意味と整合性がある。すなわち、人がこういった行動をとるときは、見知った間柄の人に対して行うのが普通だからである。ペチューニアおばさんが、スミレ色の帽子をかぶった小さな男の人とハリーが顔見知りだと思い込み、激しくハリーを問いつめたのも、そういった経験則にしたがったからに他ならない。

さて、これまでknowが主体と対象が見知った間柄であることを意味する例を見てきたが、ここからknowが日本語の「知っている」に近い意味を表している例を見てみよう。とは言っても、これまでの主張を翻すわけではない。英語には、knowを用いながらも、ある知識を間接的に得たことを表現するための手段がある。(11) は、ミス・マープルシリーズの『予告殺人（A Murder is Announced）』

のなかで、クラドック警部（Inspector Craddock）が、ピップ（Pip）なる人物と思ってきた人間の正体が目の前のエドマンド・スウェテナム（Edmund Swettenham）ではないかと考え、自白を引き出そうと詰め寄る場面である。

（11） If Miss Blacklock dies before Mrs. Goedler, two people inherit, remember. The two we know of as Pip and Emma. Julia Simmons has turned out to be Emma—'

(Christie, *A Murder is Announced,* Ch.23)

「もしミス・ブラックロックがゲドラー夫人より前に死んだら、二人の人間が遺産を相続することになる。憶えているね。我々がピップとエマとして知っている（＝ピップとエマだと思っていた）二人だ。ジュリア・シモンズがエマだということは判明したが……」

（11）の下線部から明らかなように、ここではknowとその対象との間に前置詞ofが介在している。ofが介在することによって、主体がピップとエマという人物について間接的な情報（設定上、名前と出自）しかもっていないことを合図している。実際、物語の中では、ピップとエマは偽名を名乗り正体を隠している。誰がピップで誰がエマかは、物語が終盤に近づくまで明らかにされない。このような状況下で、素性と名前だけが分かっている人物をクラドック警部視点で表現すれば、The two we know of as Pip and Emmaとなるのである。

（12）も（11）同様、『予告殺人』からの引用であるが、ここではknowではなくhear ofが用いられている。すなわち、「主体が対象について聞き知っている」という文脈である。

（12） "He's rather before your time, I expect,' said Miss Blacklock. "But you've probably heard of him."

"Oh, yes. He was a millionaire, wasn't he?"

(1950, Christie, *A Murder is Announced,* Ch.10)

レティシア・ブラックロック：「彼（ランダル・ゲドラー）は、あなたより一時代前の人じゃないかしら。でも、おそらく彼のことはお聞きになっているでしょう。」

クラドック警部：「ええ、聞いたことがあります。たしか億万長者でしたね。」

実験的に、hear ofの代わりにknowを用いて表現してみよう。

（13） “He’s rather before your time, I expect,’ said Miss Blacklock. “But you probably know him.”

「知っている」を用いて日本語で表現すれば、「彼は、あなたより一時代前の人じゃないかしら。でも、おそらく彼のことは知っているでしょう。」となり、これは日本語の母語話者にとって矛盾無く首尾一貫した表現であるが、(13）の英語は論理的に破綻を来している。ゲドラーとクラドックに面識が無いことが分かりきっているにも拘わらず、しかもゲドラーが故人であることを知っていながら、「あなたと彼（ゲドラー）は顔見知りなんでしょう？」と当然のように確認要求することは全く理にかなっていない。

know ofを用いた別の例も見ておこう。(14）は、『オリエント急行の殺人（Murder on the Orient Express)』のなかで、エルキュール・ポワロ（Hercule Poirot）がハードマン（Cyrus Hardman）に、ラチェット（Samuel Ratchett）殺しの容疑者候補に心当たりがないか尋ねる場面である。

（14） Do you know of anyone connected with the Armstrong case who answers to that description: small—dark—womanish voice?”

(Chrisite, *Murder on the Orient Express,* Part II, 9)

「あなたは、アームストロング事件に関係のある人の中で、例の人相——小柄で、髪が黒く、女のような声をした人物を知りませんか（＝人物に心当たりがありませんか）？」

ここでポワロが求めているのは、ハードマンが見知っている人物のなかで、小柄で髪が黒く、女のような声をした人物がいるのかどうかではない。該当者の検索範囲はもっと広い。この人だと思い当たる人物がいればいいので、人から聞いたことがあるとか、どこかの記述を読んだことがあるとか、うわさ話程度に聞き知っていたとか、あるいは推論によって導き出した結果でもよい。ポワロとしては、殺人犯を見つけるために、そのような間接的手がかりであったとしても入手しておきたいのである。

3 「知っている」の文脈依存性はどこから来るのか

これまでの議論によって明らかとなったのは、日本語の「知っている」が、主体が対象とどのような関わり方をして、どの程度の知識を持っているのかについて、談話文脈にその解釈を委ねるという特性をもっていることである。第3節では、日本文化と欧米圏の文化を対照させることによって、日本文化の文脈依存的特徴を浮き彫りにし、この文化的特徴が「知っている」を含めた日本語の語法に影響を与えていることを主張する。

3.1 日本文化と欧米文化の特徴づけ

この節では、石井・岡部・久米（2004: Ch.2）及び橋本（1997: Ch.12）に基づいて、日本文化と英語圏の文化を特徴づける。文化はコミュニケーションにおいて直接言語化されないが、強い影響力を及ぼしている。このことを示すために、まず日本文化の特徴である「(民族的）同質性」、「垂直性（＝タテ型社会)」、「相互依存性（＝甘え)」、「点的思考」等の概念を考察してみたい。

日本人は民族的同質性が高いため、構成メンバーの意識には多くの共通項が存在する。さらに、家庭、地域社会、会社といったそれぞれの場ごとに集団が構成されていて、その場の中でタテ型の序列関係が形成されている。このような階層度の強い日本社会では、相互依存の人間関係が発達していて、そこでは個人よりも集団が強調され、個別的人間関係が絶対的人間関係に優先されることもしばしばある。言語コミュニケーションにおいては、コンテクストの多くが共有されていることから、言語コードを必要最低限に抑えた、きめの粗いコミュニケーションが特徴的である。さらに共有された言外の情報に依存しながら会話が進むため、言葉によって表現される部分（＝文）の間の連続性が失われ、総合的・点的・間的な思考パタンを取る傾向にある[10]。

島国国家ゆえの「同質性」を育んできた日本と対照的なのが、他民族・他文化との接触を繰り返してきた欧米の国々である。欧米の人々は、異文化間接触を通して「異質性」を意識してきたにちがいない。一国の文化的特徴として「異質性」を持つ国は、言うまでもなくアメリカである。そこでは人種、言語、慣習のどれをとっても「異質性」が際立っている。また、欧米社会一般に当ては

[10]「総合的」とは、細部は抜きにして全体的・蓋然的に物事を捉える様を意味する。また、「点的」・「間的」とは、言葉によって表された部分（＝文）間で連続性や結束性が失われている様を意味する。

まることであるが、キリスト教の影響から「人間は神の下に平等である」という信念が根差している。言い換えれば、欧米社会は「水平性（＝平等原理）」によって特徴づけられる「ヨコ型社会」ということになる[11]。また、欧米社会では、人が他人に対して愛情を求めたり、依存したりすることを強く抑圧する傾向が見られる。これは、対人関係を規定するファクターとして、「自立性」が存在するからである。これも相互依存的な日本社会と対照的な特徴である。「異質性」、「水平性」、「自立性」といった概念に根差した社会では、個人は別個人に対して率直に意見を述べ、意見が異なった場合は相手を説得しようとする傾向が強くなる。したがって、自ずと言語コードを駆使したコミュニケーションスタイルが発達するのである。このような社会では、日本的コミュニケーションスタイルとは対照的に、「分析的」、「線的」思考パタンをとる傾向が強くなる。そこでは物事を蓋然的・総合的に把握するのではなく、要素ごとに細かく切り刻み、分類・類型しながら分析する。さらに、相手をうまく説得するために、論理的且つ首尾一貫した論の展開が要求される。

ここで、日本文化と欧米文化について比較してきた内容を、表１としてまとめておくことにする。表１では、コミュニケーションスタイルに影響を及ぼすと思われる価値前提のなかでも特に、「社会・文化の本質についての価値前提」、「対人関係についての価値前提」、「思考パタンについての価値前提」の三点について、欧米文化と日本文化のもつ特徴をキーワードとして示している。

表１　欧米と日本の価値前提の違い

欧　米	日　本
◇社会・文化の本質についての価値前提	
水平性、異質性（特にアメリカ）	垂直性、同質性
◇対人関係についての価値前提	
自立／独立性、個人主義	相互依存性、画一主義
◇思考パタンについての価値前提	
分析的、線的	総合的、点的

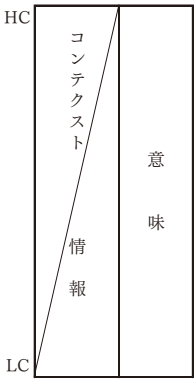
欧米文化と日本文化における価値前提の違いを概観したところで、文化と言語コミュニケーションの関係を論じたHall（1976）に言及しておくことは、こ

[11] ここでの「水平性」は、現実に平等社会が成立しているということを意味しているのではなく、平等が建て前になっているということを意味している。

れからの議論にとって有意義であると思われる。Hallは、ある文化のメンバーがメッセージの記号化と記号解釈の過程で、どの程度コンテクスト（物理的環境、社会的環境、心理的環境、時間的環境、非言語コード、対人関係など）を考慮するかに着目し、文化を「高コンテクスト文化（high-context culture）」と「低コンテクスト文化（low-context culture）」の二つに分類した。

（極端な）高コンテクスト文化では、話し手の意図（話し手が聞き手に伝えようとする意味のことで、図１では「意味」と表示した）の大部分が言外の情報（＝コンテクスト）として背景化されており、言葉によって表現される部分（＝情報）が極めて少ない。このような文化では「同質性」に基づくメンバー間の結束が強く、集団主義的傾向が観察される。また、伝統的に特定の行動規範が確立していることが多い。高コンテクスト文化では、共有されている背景知識が豊富なので、言語コードに依存しないコミュニケーションの遂行が容易である。日本的コミュニケーションスタイルは、まさに高コンテクスト文化を代表するものである。

一方、（極端な）低コンテクスト文化では、話し手と聞き手の間で共有している前提が極めて少ないので、話し手は自分の意図を言葉によって伝えなくてはならない。このタイプの文化ではメンバー間の結びつきが弱いため、当然、変化に対する抵抗力も弱い。自ずと個人主義的傾向が観察される。言葉によるコミュニケーションにおいても、言語コードを駆使して意志を伝える傾向が強くなる。欧米（とりわけ、アメリカ）的コミュニケーションスタイルは、まさに高コンテクスト文化を代表するものである。



○コンテクスト
物理的環境、社会的環境、心理的環境、時間的環境、非言語コード、対人関係など

○HC（高コンテクスト）文化
・集団主義的傾向が見られる。
・変化に対する抵抗力が強い。
・伝統的に特定の行動規範が確立している。
・言語コードの使用が抑制される。

○LC（低コンテクスト）文化
・個人主義的傾向が見られる。
・変化に対する抵抗力が弱い。
・メンバー間で共有する前提が限定されている。
・言語コードを駆使して意志を伝える。

図１　文化コンテクストと情報の相互作用

日本文化と英語圏の文化がそれぞれ、高コンテクスト文化（文脈依存度が高く、言語コードの使用を極力避ける文化）と低コンテクスト文化（文脈依存度が低く、言語コードを駆使する文化）に属すると考えると、それぞれの文化類型を反映するものとしての日本語と英語が存在するのではないかという予測が成り立つ。具体的には、高コンテクスト文化に属する日本語では、ある語彙の語法が文脈依存的、総合的になる傾向があり、低コンテクスト文化に属する英語圏では、ある語彙の語法がコード操作的、分析的になる傾向があるという予測である。次節でこの予測を検証してみよう。

３.２　語法に見られる日本語と英語の違い

この節では、日本語と英語の動詞を幾つか取りあげ、それぞれに高コンテクスト文化ならではの特徴と低コンテクスト文化ならではの特徴が観察されることを例証する。具体的には、出来事の結果部分まできっちりと語彙化する傾向が強いのが、低コンテクスト文化を代表する英語であり、出来事の結果部分を含意（＝文脈から推論される意味）として聞き手の解釈に委ねる傾向が強いのが、高コンテクスト文化を代表する日本語であると主張する（大村（2016））。

まず初めに、(15）と（16）の対比を考えてみよう。一見して（15b）と（16b）は全く同じ事態を表現しているように見えるが、日本語では文法的であるのに対して、英語では非文法的である。

（15）　a.　チュンサンは湖で溺れた。
　　b.　チュンサンは湖で溺れたが、近所の漁師によって無事助けられた。

（16）　a.　Joon-sang drowned in the lake.
　　b.　*Joon-sang drowned in the lake, but he was saved by a local fisherman.

大村（2016）は、日本語の「溺れる」は溺れた結果どうなったのかという部分が文脈に依存して補われると考え、実際（15a）では溺れて死んだという含意が生じるが、(15b）の文脈が与えられるとこの含意が締め出される結果となると説明した。一方、英語の「溺れる ‘drown’」は、出来事の結果まで含めた意味（すなわち、「溺れて死ぬ」という意味）をもつため、(16b）のように「溺れて死んだ ‘drowned’」と言った直後に、「でも命が助かった」と言ってしまう

と忽ち意味的矛盾を引き起こしてしまう。参考までに、(16b) に副詞almostを付け加えて (17) のように表現すれば、溺れて死にそうになった (すなわち、溺れて死ぬという出来事が完結しなかった) ことになり、意味的矛盾が解消される。

(17) Joon-sang almost drowned in the lake, but he was saved by a local fisherman.

つぎに、日本語の「説得する」と英語のpersuadeを比較してみよう。(18) は産経ニュースWeb版から引用した記事である。

(18) 29日午後1時50分ごろ、埼玉県飯能市岩渕のみどり橋で、「男性が橋の上から飛び降りようとしている」と通行人から110番があった。飯能署員7人が駆けつけたところ、男性が橋の欄干 (高さ約1.1メートル) を乗り越えて立っていた。署員は「話をしよう」などと声をかけて説得したが、約1時間後、男性は橋から約20メートル下の成木川の河川敷に飛び降り死亡した。
(産経ニュースWeb版、2009.6.29)

この記事の最後の一文に「……説得したが……死亡した」という記述があるが、(日本語の母語話者として) そこに意味的矛盾は感じられない。

英語での状況は一変する。(19b) のように、「警官はその男性が橋から飛び降りないように説得した (the police officers persuaded the man not to jump off the bridge)」の後に「その男性は橋から飛び降りて死んだ (he did and died)」と付け加えると、忽ち意味的矛盾を引き起こしてしまう。

(19) a. The police officers persuaded the man not to jump off the bridge.
b. *The police officers persuaded the man not to jump off the bridge, but he did and died.

persuadeの意味は、「人を説得して考えを変えさせる」である。すなわち、説得行為の結果も語彙化されているのである。したがって (19a) の正確な意味は、「警官はその男性を説得して橋から飛び降りることを思い止まらせた」とな

る。当然のことながら、(19b) のように「説得して橋から飛び降りることを思い止まらせた」と言った直後に、「その男性は橋から飛び降りて死んだ」と言ってしまうと、意味的矛盾が生じるのである。

一方、日本語の「説得する」という動詞には行為の意味のみが語彙化されており、説得行為の結果部分は文脈に依存して理解されると考えられる。したがって、「警官が男性を説得したにも拘わらず、男性は橋から河川敷に飛び降りて死んだ」と言っても、意味的矛盾は生じないのである。

因みに、英語の場合、(19b) の文を (20) に示したように修正すると、(17) の場合同様、意味的矛盾が解消される。

(20) The police officers tried to persuade the man not to jump off the bridge, but he did and died.

今やこの理由は明白である。「説得しようと試みた 'tried to persuade'」として出来事が未達成となれば、文の後半部分で「男性は橋から飛び降りて死んだ 'he did and died'」としても意味的矛盾が生じないのである。

つづいて「閉める」とcloseについても考察してみよう。(21a) は日本語として不自然な文であるが、非文法的と判断するほどではない。興味深いことに、「一生懸命」や「力いっぱい」といった努力を表す副詞をつけてみると、(21b) のように不自然さがかなり解消してしまう。

(21) a. ？チュンサンはドアを閉めたが、完全に閉まらなかった。
b. チュンサンは一生懸命／力いっぱいドアを閉めたが、完全に閉まらなかった。

「一生懸命」や「力いっぱい」という表現は動作に精出していることを表すので、ドアを開ける行為の方に注意が向けられ、結果状態 (＝ドアが閉まったこと) が潜在化するためだと考えられる (景山 (2002))。行為の結果を語彙化していると想定される日本語の「閉める」のような動詞であっても、(21b) のような文脈においては、結果意味の部分が希薄化してしまう。それが日本語という言語なのである。

(21a) に対する英語の文は (22) であるが、but以下の文脈を付け加えると、当然の結果として意味的矛盾を引き起こす。

（22） *Joon-sang closed the door, but it was partly open.

さらに日本語とは異なり、(23）のように「一生懸命」にあたる副詞hardを付加することもできない。

（23） *Joon-sang closed the door hard.

副詞hardは行為を修飾するのであって、行為の結果状態は修飾できない。英語の動詞closeのように、結果状態が堅固に語彙化している（別の言い方をすれば、結果状態が強調されている）動詞は、hardを用いて修飾できないのである。

以上、出来事の結果部分まできっちりと語彙化する傾向が強いのが、低コンテクスト文化を代表する英語であり、出来事の結果部分を含意（＝文脈から推論される意味）として聞き手の解釈に委ねる傾向が強いのが、高コンテクスト文化を代表する日本語であることが明らかとなった。

３．３ 「知っている」の語義への応用

既に概観したように、高コンテクスト文化に分類される日本文化では、共有される言外の情報に依存することで、言語コードの使用が必要最低限に抑えられるとともに、思考パタンが総合的になる。前節では、こういった文化的特徴が出来事を表す動詞の意味に反映されているという見解を述べた。具体的には、出来事の結果が動詞の意味のなかに語彙化されていない（あるいは、非常に弾性に富んでいる）ため、文脈に依存して補完される（あるいは、決定される）と主張した。

ここで、語彙意味の一部が文脈に依存して理解されるという特徴を「知っている」にも応用してみよう。「知っている」は結果状態を表す状態述語である。この述語に関しては、知識を得た結果状態が語彙化されている一方で、情報源やどの程度の質の知識が得られたのかに関する部分が未指定である（したがって、当該部分の意味は文脈に依存して補完される）と想定できる。出来事を表す動詞の事例同様「知っている」の事例もまた、高コンテクスト文化の性質が語義に反映された結果であるという提案である。

（７）の日本語訳である（24）を例として、この想定を検証してみよう。

（24） ジョン・レノンを知っていますか？彼は有名なミュージシャンでし

た。私は彼の曲が大好きです。」

（24）において、話し手は、ジョン・レノンに関してもっている知識の質（すなわち、その情報が一次的な情報源から得た情報であるのか、二次的な情報源から得た情報であるのか）について何も意識していない。これは、「知っている」の語義として「〜についての知識がある」とだけ記載されており、この結果状態にいたる経緯（あるいは、根拠）が問題とならないからである。

日本とは対照的に、低コンテクスト文化に属する英語圏では、言語コードを駆使したコミュニケーションスタイルが発達している。このような社会では、物事を蓋然的・総合的に把握するのではなく、要素ごとに細かく切り刻み、分類・類型しながら分析する傾向が強い。さらに、このような文化的特徴が語彙意味に反映されると、日本語とは対照的に、語義がより厳密に指定されることが予測できる。実際、前節で確認したように、英語の出来事動詞は結果状態まで語義の中に盛り込む。そこには、文脈に依存して聞き手に語義の決定を委ねる体質は見当たらない。

knowの語義に関しても低コンテクスト文化の特徴が確認できる。ここでは、ある程度の質が確保されるに十分な経験的情報源が要求される。OEDには、knowが「五感をとおして情報を得る（to know by the senses）」ことを意味する動詞を祖先にもち、現代では一般的に（25）に示したような意味をもつと記されている[12]。

（25） Know, in its most general sense, has been defined by some as ‘To hold for true or real with assurance and on (what is held to be) an adequate objective foundation’. (OED)
knowの最も一般的な意味は、大体、「自信をもって、かつ適切で客観的な根拠に基づいて何かが真実あるいは本物であると考えること」のように定義されてきた。

私たちはもはや、英語母語話者にとって（26）がなぜ奇妙に感じられるのか

[12] インド＝ヨーロッパ言語では、実体験の結果としてある情報をもつこと（to know by the senses）を表す動詞と、思い至った結果としてある情報をもつこと（to know by the mind）を表す動詞が区別されることがある（OED）。たとえば、ドイツ語では、前者がkennen、後者がwissenである。同じゲルマン語である英語においても同様の区別が存在していたと考えられる（ʒecnáwan ‘know’ vs. witan ‘wit’）が、現代英語では後者の意味を表す動詞（wit）は一般的ではない。

がよく理解できる。

（26）(=(7)) Do you know John Lennon ? He was a famous musician. I like his songs and music very much.

客観的な根拠に基づいてある人の人となりを判断するためには、その人と親交があり顔見知りであることが必要である。当然のこととして、テレビでしか見たことがない有名人（しかも故人）について、その人と顔見知りであることは、現実離れした、あり得ない状況を意味する。

4　結語

本稿では、日本語の「知っている」をとりあげ、この動詞の主体が対象とどのような関わり方をして、どの程度の知識を持っているのかについて語彙的に指定されていないと想定した。このことは、情報を得た経緯（あるいは、情報の質を保証するための根拠）について問題としていないことを意味する。当該部分の意味は、談話文脈に依存して補完される。本稿は、このような特徴が、日本文化が典型的な高コンテクスト文化であることから導かれると提案した。

引用文献

Grice, H. Paul (1975) “Logic and Conversation,” in *Syntax and Semantics 3: Speech Acts,* ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, pp.41-58, New York: Academic Press,.

Hall, Edward T. (1976) *Beyond Culture,* New York: Anchor Press.

橋本義明（編著）(1997)『コミュニケーション学への招待』，東京：大修館書店.

石井敏・岡部朗一・久米昭元（1987)『異文化コミュニケーション』，東京：有斐閣；第13版，東京：有斐閣，2004.

影山太郎（2002)『ケジメのない日本語』，岩波書店，東京.

大村光弘（2016)「文化を映し出すことば―日英比較から文化を言語学する―」，『人文論集』66(2)，81-95，静岡大学人文社会科学部.

小説

赤川次郎『家族カタログ』，東京：角川書店，1995.
Cristie, Agatha *Murder on the Orient Express,* UK: Collins Crime Club, 1934; Rpt., UK: HarperCollins Publishers, 1991.
Cristie, Agatha *Curtain: Poirot's Last Case,* UK: Collins Crime Club, 1975; Rpt., UK: HarperCollins Publishers, 1993.
Cristie, Agatha *A Murder is Announced,* Collins Crime Club, 1950; Rpt., UK: HarperCollins Publishers, 2017.
東野圭吾『ガリレオの苦悩』，東京：文藝春秋，2008.
西尾維新『化物語（上）』，東京：講談社，2006.
西尾維新『化物語（下）』，東京：講談社，2006.
Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone,* UK: Bloomsbury, 1997.